学級担任によるカリキュラム・マネジメントの進め方の考察

高野 浩男・中井 義時
学級担任によるカリキュラム・マネジメントの進め方の考察

高野浩男1) 中井義時2)

本研究は、新学習指導要領（2017）において三つの側面から解釈されたカリキュラム・マネジメントについて、学級担任の視点からの進め方を考察することを目的とする。

総合的な学習の時間を中心にした教科横断的なカリキュラムで進める『地域や学校の特色に応じた課題』に関する学習（第5、6学年）カリキュラム・マネジメント三つの側面（以下、「カリキュラム三つの側面」という）を踏まえた計画、実践、評価、改善しながら取り組むとともに、その成果と課題を学校の総合的な学習の時間の全体計画へ反映させた。その結果、「カリキュラム・マネジメント表」を学級担任が創造、見える化の中で実践し、評価と改善を繰り返しながら進めていくことは、目標を明確化することにおいて有効であったことが示された。また、教職員全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの進め方として、学級担任による実践の成果等を学校の総合的な学習の時間の全体計画に反映していくという一つの進め方を示すことができた。

キーワード：総合的な学習の時間の全体計画、カリキュラム・マネジメントの三つの側面、カリキュラム・マネジメント表

1 はじめに
カリキュラム・マネジメントの定義については、小学校教育指導要領（2017）における小学校教育の基本と教育課程の役割（第1章総則第1の4）の中で次のよう示された。

「各学校においては、児童（生徒）や学校、地域の実情を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人材又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通じて、教育課程に基づく組織の計画において清明の学級担任の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）を努めるものとする。」

また、小学校教育指導要領解釈要綱（2017）において、これからのカリキュラム・マネジメントを充実していくための三つの側面（「教科横断的なカリキュラムの構成」「評価と改善の充実」「人的又は物的な体制の確保」）及びカリキュラム・マネジメントの観点を踏まえた学校における教育課程の編成や改善に取り組む際の手順の一例も詳細に示された。

カリキュラム・マネジメントという文言及びその意味、教育方策としての必要性は、総合的な学習の時間が実施される頃から中留・田村（2004）、田中（2006）等によって提起されてきたが、この言葉が支部科学者の文章に初めて登場したのは、中央教育審議会答申（2005）「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」の中であり、その中では「校長や教員等が学習指導要領や教育課程についての理解を深め、教育課程の開発や実施（カリキュラム・マネジメント）に関する能力を養うことが極めて重要である。」と述べられている。次に登場するのは、中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改革について」においてであるが、それは、「9. 教師が子どもたちと向き合う時間の確保などの教育条件の整備等」の文脈の、「(3) 執拗的、効率的な指導のための諸方策」の一つとして、「教育課程や指導方法等を不断に見直すことにより効果的な教育活動を充実させるといったカリキュラム・マネジメントを確立することが求められる。」と示されている。

このことについて、合田（2015）は、「まず教職員定数の改善が指摘されているが、教員定数を増やすだけではなく、効果的・効率的な指導のために、
教育課程における PDCA サイクルの的确立が必要で、そのための位置付けとしてのカリキュラム・マネジメントであった。』と述べている。そして、2008 年の指導要領解説（小・中学校）の総合的な学習の時間編において、「計画、実施、評価、改善」というカリキュラム・マネジメントの考え方とその方法が示され、カリキュラム・マネジメント的重要性は少なからず意識され始めたと言える。新学習指導要領（2017）で注目すべきは、「教育課程の在り方を断言指向」というこれまでのカリキュラム・マネジメントの目的である「評価と改善の実充」に加え、「教科等横断的なカリキュラムの作成」「人的又は物的制約の確保」の側面が加えられ、三つの側面として整理されたことである。その理由については新学習指導要領が示す理念（「社会に関わる教育課程」）を実現するための新たな側面を加えたカリキュラム・マネジメントを実施する必要があったと述べている。「社会に関わる教育課程」については抽象度の高い文言であるが、新学習指導要領（2017）の前文から、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有すること」「これからの社会を創りだしていく資質・能力を教育課程において明確化していくこと」「社会との連携及び協働により目標とここ印実現に囲めいくこと」と要約できる。このようなことから、これまでのカリキュラム・マネジメントにおいては、教育課程の在り方を断言指向を一連の PDCA サイクルが再視されたが、今後は、「社会に関わる教育課程」を目指すことを、「人的又は物的な制約の確保」等二つの側面を加え、以下の三つの側面を示したと言える。

1. 児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと。
2. 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。
3. 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保することとその改善を図っていくこと。

このような、新学習指導要領（2017）及びその解説編解説等では「カリマネ三つ側面」とその重要性について言及されているが、今回の改訂で大切なことは、「知識と技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの資質・能力等を、子どもの実態に応じて育成すべき目標に設定するとともに、その目標を達成するために、主体の、対話的で深い学びのある授業を意識的、計画的に、継続的に実践していこうということが考えられる。そして、このような継続的な実践を支えるのがカリキュラム・マネジメントであると考えている。そして、カリキュラム・マネジメントの目的は学校教育目標をより効果的、効率的に具現化することであり、その意味で学校教育目標の具現化はカリキュラム・マネジメント実践上の基本的な課題であると言っている。田村（2014）は、カリキュラムマネジメントの定義を「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成していく仕組み」としておりわかりやすく整理している。

図 1 は、山形県小学校中学校と教員等を対象に実施した学校教育目標具現化に関する調査[2]の結果である。

学校教育目標の具現化等に関する調査については、「学校教育目標について保護者や子どもに説明できる。」（目標の理解）、「学校教育目標について定期的に評価し、取組の改善につなげている。」（目標の評価、改善）、「学校教育目標の達成感を持つことが多い。」（目標の達成感）、「学校教育目標は学校目標を具現化できるものである。」（目標と学習目標）と 4 項目について設問し、A：十分あてはまる（十分該当）、B：だいたいあてはまる（該当）、C：あまりあてはまらない（十分でない）、D：全くあてはまらない（不十分）から、最も近いものを回答してもらった。

図 1 学校教育目標の具現化等に関する調査結果（2017）

調査対象が教務主任等、学校経営に関わる教員であるが、学校教育目標の理解や評価、改善の取り組みについて「十分あてはまる」と回答した割合が非常に低い。「だいたいあてはまる」と回答した割合を加えると 75％を超えるが、約 25％の教員が目標を理解していない。さらに、目標についての達成感を持っている教員は、「十分あてはまる」と回答した割合が 10.2％と低く、「だいたいあてはまる」と回答した割合 45.8％を
加えて、56%である。学校教育目標が達成できない理由は、達成のための取り組みが十分でないか、達成困難な高い目標を掲げているか、目標自体が具体性に欠け、評価が困難であったと言える。

また、適切な学校教育目標が設定されるとともに、その具現化のためのカリキュラム・マネジメントをどのように進めていくかという課題がある。図2も、14ある調査を通じて、県内の学校を中堅教師等を対象に実施したものである。「カリキュラム・マネジメントの認識」、「取組等に関する調査」、「カリキュラム・マネジメントの理解」、「カリキュラム・マネジメントに関する研究」、「学年等の年間教育計画について、教科の横断的な視点で内容を配列しているもの」、「学年（学級）の子どもを尊重する指導計画を作成しているもの」、「実践を踏まえた指導計画」と4項目について調査した。特に、学年等の年間教育計画について、教科の横断的な視点で内容を配列しているもの」、「学年（学級）の子どもを尊重する指導計画を作成しているもの」、「実践を踏まえた指導計画」と4項目について調査した。特に、学年等の年間教育計画について、教科の横断的な視点で内容を配列しているもの」、「学年（学級）の子どもを尊重する指導計画を作成しているもの」、「実践を踏まえた指導計画」と4項目について調査した。特に、学年等の年間教育計画について、教科の横断的な視点で内容を配列しているもの」、「学年（学級）の子どもを尊重する指導計画を作成しているもの」、「実践を踏まえた指導計画」の調査に対し、「十分である」(5.1%)「だいたいあてはまる」(22.9%)と回答した割合が低かった。

図2 カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査(2017)

高野はこのような学習指導要項改訂の動きを山形県教育センターや指導方針へ（2013.4.1～2016.3.31）の時点から注目してきた。そして、山形市立小学校（2016.4.1～現在に至る。以下、「山小」という。）の新任において研究主任等学校経営の中心に加わり、学校教育目標と学習指導要項が達成する目標とする。学校教育目標と学習指導要項が達成する目標であるために「学生の综合素质の時間的全体計画」を、子どもに育てたい資質・能力の観点からも整理した。注目すべきは、学級担任としての実践を通しながら学校の全体計画等を整理し、さらに実践を通じて学校の全体計画の見直しを行い、より子どもたちの実態に即したカリキュラムにいたるという点である。また、そのための中で、山小が定めた総合的な学習の時間の高学年の内容である「地域や学校の特色に応じた課題」を通じてカリマネ三つの側面を踏まえた指導の在り方を学級担任として2年間にわたって追求した。

本論文における高野の実践は、このような新学習指導要項において授業、教育課程、学校経営の改善・充実の要となる三つの側面を踏まえたカリキュラム・マネジメントの望ましい進め方を、小学校高学年ににおける総合的な学習の時間の「地域や学校の特色における課題」の実践を通して、学級担任の視点から考察するものである。

このことは、前述した「学校教育目標具現化に関する調査結果」と「カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査結果」を見ると、県小学校の学習課題を解決していくことからも高野の実践は意味のあるものである。 （中井 義時）

2 研究の目的と方法

本研究は、新学習指導要項（2017）で整理されたカリマネの側面を踏まえ、学級担任の視点に立ったカリキュラム・マネジメントの進め方について考察することを目的とする。

これまで、文部科学省がカリキュラム・マネジメントに求めてきたことの経験や新学習指導要項（2017）の実施上の重要性については中井が述べてきたことである。その教育効果の分析・考察方法としては、下記の手順で実践を進め、その実践を教育の質の向上を目的とする効果的な手法として新たに整理されたカリマネの側面から分析・考察していく。

(1) 既存の学校教育目標具現化に向けて、学級の子どもに必要な資質・能力を育成するための総合的な学習の時間の実践を試みる。

(2) 上記(1)の実践を新学習指導要項が指す資質・能力との関わりで整理するとともに、「学年等の総合的な学習の時間の全体計画」を、子どもに育てたい資質・能力の観点から見直し既存の全体計画の改訂を図る。

(3) 第5、6学年総合的な学習の時間「地域や学校の特色における課題」について、「カリマネの側面」を踏まえた指導計画で実践し、アンケート調査や抽出した子どもの振り返りの対策等の分析を通じて、その成果と課題を考察していく。 （高野 浩男）
3 実践と考察
(1) 学校教育目標具現化計画の整理

【教育目標】
ともに学び、豊かなくらしをつくる子ども
①しっかり学び、学びを大切に
②しっかり学び、学びを大切なこと
③わらわかな子ども

主観性

協働性

創造性

てき子どもの学びの姿

【目指す子どもの学びの姿に必要な質素・能力】

知識・技能
思考力・判断力・表現力
学びに向かう

図3 山小の学校経営及び研究全体構想の模式

前述した山小の「目指す子どもの学びの姿」に必要な質素・能力の育成に向けて、総合的な学習の時間では図4のように全体計画を作成した。

全体計画作成のポイントは以下の二つである。

一点目は、「総合的な学習の第一条」と山小の教育目標を踏まえた「目指す子どもの学びの姿」を基に「山小の総合的な学習の目標」を設定することである。教育目標の実現に向けて「目指す子どもの学びの姿」（主体性、協働性、創造性）に必要な質素・能力として知識・技能、思考力・判断力・表現力等を学びに向かう力の3つを設定した。

二点目は、各学校で定める内容について、学校や地域の実態を踏まえ、総合的な学習の時間の目標を実現するためのしくみを「探究課題」と、その探究課題の解決を通じて育成される質素・能力を具体的に示したことである。総合的な学習の時間が充実し子どもに目指す質素・能力が身に付けば、その他の教科等を通じて必要な質素・能力も身に付くことになる。

図3のとおり、山小では学校教育目標に掲げる子どもの姿の実現に迫るため、主体性、協働性、創造性の3つの視点で「目指す子どもの学びの姿」を設定した。

これらの視点で学校の教育活動を考え教育課程を編成することになるが、これらの視点について、日々の授業でどのように学びを展開し、どのような子どもを育成したいのかを、教職員が、よりイメージできるようにした。校内研究の中で具体化を図り、学校経営の三柱として、「主体性（自分の思いをもち学び続ける子ども）」、「協働性（かわりながらともに学ぶ子ども）」、「創造性（学んだことを生かそうとする子ども）」、子どもの姿を表し、全教職員で共有した。さらに、「目指す子どもの学びの姿」になるために必要となる育成すべき質素・能力を図3のとおり設定した。これには新学習指導要領で示されたものと同様であり、この質素・能力を育成することが目指す子どもの学びの姿の実現及び、教育目標の達成につながると考えた。
第5学年（2016年度）での実践と考察

① 実践の概要

2016年度から本学年に担当しているが、4月当月の学びの姿からは、自分らしさを発揮して課題解決に取り組んだり、課題解決に向けて協働的に取り組んだりするという主体性に課題があり、「学びに向かう力」を高めていく必要があった。このような実態を踏まえ、地域をテーマにし、学校内外の人材と積極的学習を展開することで興味・関心をもたせながら「学びに向かう力」を高める実践を試みた。

このような子どもの現状に鑑み、まずは、担任から「課題を提示すること」と、探究課題を図4で示した「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織等を対象に探究する」と「商店街等の再生に向けて努力する人々と地域社会を対象に探究する。」を設定した。教材としては、北山形町のシングルでもある小便小僧に目を向け、北山形駅前商店街の活性化への意図を掴ませたと考えた。まず、現在、北山形駅周辺の商店街も減少が心配で、元気がなくなってしまっていることを知るために町に出かけ聞き取り調査を行った。また、北山形駅前の今昔の違いやその変遷について北山形駅前の魚屋店主に話を聞いた。その後、子どもによる話し合いの中で、「なぜ現在は昔と違って賑わいが減ったのか」「少しでも昔のように元気な町にならないか」等の意見が出され、『地域の方々が元気になるような活動をしよう！』という学習テーマが設定された。そして、「地域を元気にする活動は何かについての話し合いを通して重ねた結果、イベントとしての「たいよう祭り」を開催することが決まり、下記の8つのテーマに分かれて準備にあたった。

ア 手品を披露する
イ 動画で地域を紹介する
ウ みんなが元気になる看板をつくる
エ みんなが元気になるポスターをつくる
オ 小便小僧のグッズをつくる
カ 小便小僧のスーツをつくる
キ 小便小僧の像をオリジナルでつくる
ク NPO法人が行う小便小僧の衣替えを手伝う

準備を進めるとおり、計5つのチームから準備に向けて詳しいことを教えてくれる人が必要であるという要求があり、表1に示してある学習に関わる専門家や地域の人に聞いてもらうことにした。子どもたちは、疑問に思ったことを質問したり、専門家の指導や助言を受けたりしながら準備を進めることができた。「たいよう祭り」の当日、約100名の保護者や祖父母、地域の方々、そして、これまでお世話になった専門家の方々等が集まった。そこで、子どもたちは8つのチームごと学習の成果を発表することができた。

② 「カリマネ三つ側面」からの考察

本実践は、2016年度の実践であり、当初から「カリマネ三つ側面」を踏まえた計画による実践ではなかったが、この三つの側面を考察してみた。

「カリマネ三つ側面」の「教科横断的な視点でのカリキュラムの作成」「評価と改善の充実」については課題が多い。学びに向かう力を高めることを意識し過ぎ、学習をどう進めるかが優先し、教科横断的な視点に立ってどの資料・能力が育てできるのかという視点に立った単元計画での実践がなかった。同時に、育成すべき資質・能力が子どもにどのように身に付いたのかという評価は十分でなかった。ただ、「人間には物的体制の保障」については、一定の評価を得ることができた。まず、表1にあるように高い専門性が必要な活動においては、校内外の専門家や地域の専門家による指導助言が受けられる環境を整えたい。「たいよう祭り」当日まで複数回指導を受けた。その結果、表2のとおり、専門家の指導を受けることによって、子どもの振り返りに変容が見られた。A氏、B氏いずれも学習活動の質が高まり、専門的な知識や技能の習得、さらには学習に臨む態度の改善につながった。その他のチームにおいても表3のように校内外の専門家からの指導・助言による成果が得られた。

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1 第5学年実践における地域人材の活用</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>専門家</td>
</tr>
<tr>
<td>前山形女子専門学校の教員</td>
</tr>
<tr>
<td>北山形駅前の魚屋店主</td>
</tr>
<tr>
<td>ケーブルテレビの職員</td>
</tr>
<tr>
<td>県マジック協会会長</td>
</tr>
<tr>
<td>蒲生大先生と学生</td>
</tr>
<tr>
<td>地域の薬店の常務</td>
</tr>
<tr>
<td>NPO法人ふらっとほーむ職員</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表2 子どもの振り返りの変容と評価

<table>
<thead>
<tr>
<th>振り返り（上段・専門家なしでの学習・下段・専門家との学習）</th>
<th>評価</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ダイナミックなマジックをみまなができるようなマジックを作れる。なかなか多いマジックが見つからない。チ</td>
<td>完善主義のA児であり、最初は、どのようなマジックを行うかが決まらず悩ましていた。専門家</td>
</tr>
</tbody>
</table>
総合的な学習の時間「地域のよさをＰＲしよう！」を中心にしたカリキュラム・マネジメント表

山形市立第三小学校 6年1組 高野浩男（作成）

Ⅰ 目的について
1. 学校教育目標　「ときに学び、想いを生みその力となる　子どもたちの育成」
2. 学校がこだわる子どもの学びと育む目標
(1) 自分の頭をもって学び続ける　子ども（主体性）
(2) 思いやり、思いを広げて考えを育む　子ども（協働性）
(3) 自分の価値を確信して行い続ける　子ども（創造性）

Ⅱ 重点目標に対する子どもの学びと課題
第５学年に地域の学習の面から、子どもたちの地域に対する理解・関心が予想以上に高まった。学びに興味のある子どもは次第に課題・課題であり、地域に対する思いやりを高めていく必要がある。
また、子どもが「別,’題目、自己ののあてき、しっかりとした工夫している場合もある、「がり」子ども、」から次に、向け、関心や興味等が引き出されることにじて必要がある。

Ⅲ 課題解決のための主な手立て
三つの側面から解決されたカリキュラム・マネジメントを通して学びに興味がある主体性を高める。
1. 教科等横断的なカリキュラムを作り、教科等を基にした知、識、技術等を総合的な学習の時間で活用していくことの意義を再認し学習に対する関心を強化していく。
2. 評価をし、関心を高めるという考えを実践し、学習に対する関心を高めていく。
3. 地域人材育成に活用し、地域学習への関心・興味を高めていく。

Ⅳ 学習の重点目標を具現化するカリキュラム・マネジメント概要総合的な学習の時間「地域のよさをＰＲしよう！」を中心にしたカリキュラム一

<table>
<thead>
<tr>
<th>学習の目標</th>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
<th>9</th>
<th>10</th>
<th>11</th>
<th>12</th>
<th>13</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>麹酵糖酵のカリキュラム</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>学習内容の関係</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【創造性】
〇学びを積極的に活用し、自分の学びによくかんにしていく子ども。

【主体性】
〇思いやり、思いを広げて考えを育む　子ども。

【協働性】
〇学びに興味がある主体性を高める。

図5 総合的な学習の時間「地域のよさをＰＲしよう！」を中心にしたカリキュラム・マネジメント表
アンケートで地域に対する肯定感が十分でなかったの
も、子どもに付けたい資質・能力としての「学びに向
かう力」に課題があったと考えた。また、学習を進め
る上で「カリキュラムの側面」の重要性は理解しても、
実践上いくつかの課題があったことは前述したとおり
である。

そこで、第6学年での実践にあたって、「カリキュラ
ムの側面」に留意した。『カリキュラム・マネジメン
ト表』を作成し、教師自身が目標具現化のための学
習活動、指導の立てて、子どもの評価を見る側、意識
化して進めるようにした。図5は、総合的学習の時
間『地域のまチをＰＲしよう！』を中心にした『カリ
キュラム・マネジメント表』である。

この『カリキュラム・マネジメント表』は、学習教
育目標等を具現化するもののであるが、重点として取
り組む単元を選択して、『目標達成のための小さなカリ
キュラム』を基本にしている。特に、小学校学習指導
要領総則(2017)で整理された『カリキュラムの側面』に
留意した。以下は、『カリキュラム・マネジメント表』
作成のポイントである。(図5参照)

上段に示した内容は、「Ⅰ目標について」、「Ⅱ目標に
対する子どもの現状と課題」、「Ⅲ課題解決のための手
立て」である。目標については学校教育目標を受け、
主体性、協働性、創造性の観点から学級で目指す学び
の姿を示している。特に重点としたのは、「思いや願い、
意見を持ち、考えを出し合って課題解決に取り組む子
ども（主体性）」である。「Ⅱ目標に対する子どもの現
状と課題」の欄には重点目標に対する子どもの現状と
課題を記載した。従って、「Ⅲ課題解決のための手立て」
の欄は重点目標と対応した内容になっている。尚、学
校教育目標を受けた学級目標（主体性・協働性・創造
性）達成の手立て及び評価については、「Ⅴ指導の手立
て」と「Ⅵ評価①」に記載できるようにした。

中断には、総合的な学習の時間『地域のまチをＰＲ
しよう！』の学習活動の流れと関連する教科等の単
元採材名を、内容及び資質・能力の観点から記述し、
「教科等横断的なカリキュラム」とした表とした。

国語との関連では、6年生の1学期に学習する「よ
うこそ私たち町へ」の学習を2学期に移動した。こ
の単元での学習はパンフレットを作成して地域のまチ
を紹介しているものである。ここでは、国語の資質・
能力の思考力・判断力・表現力等である

(7) 目的や意図に応じて、感じたことや考えたこと
などから書くことを選び、集めた材料を分類した
り関係付けたりして、伝えたいことを明確にする
こと。

(9) 発言の意図に応じて、書いたことや考えたこと
について、発言の内容を再読する。事実と感想、意
見をもとに区別
し、書いたことについて、自分の考えが伝わるよう
に書き表し方を工夫すること。

(10) 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、
自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫す
ること。

自身に付けることが目標となる。総合的な学習の時間
におけるパンフレット作成時の2学期に国語の学習で
実施した。国語で身に付けた資質・能力を使って、
総合的な学習の時間で作成するパンフレットで活かし
ていくことは総合的な学習の時間のパンフレットもより
よいものになるだけでなく、パンフレットづくりを通
じて育成したい資質・能力としての思考力・判断力・
表現力等をも高めることがある。このような、パンフレ
ットを扱うという学習内容だけでPair的に関連を図る
のではなく、そこで育成される資質・能力は何なのかを
明らかにした上で、関連を図ることが必要であると考え
教科等横断的なカリキュラムを作成した。同じような考
え方で社会・図工・道徳・特別活動（修学旅行）等とも
関連を図った。

図工については、当初、関連等は考えていなかった
が、学習を進めていく中で必然的に図工との関連を図
ることになった。特に、計画であった「東京への修
学旅行でのＰＲ活動」におけるＰＲグッズとして、パ
ンフレットはもった人が喜ぶだろうか、もっても
捨ててしまいなおかつあるという話題が出た。みんな
で議論した結果、もらった人が喜ぶものとして、「桜
」が浮上し、急遽、「桜」を作成することになった。で
きる、桜のパンフレットの情報をどのように
表現するかという新たな課題が生じた。そこで、昨年
度も指導いただいた芸術工の先生方にパンフレットの
作成で生じた課題解決で「桜」作成のポイントについ
て指導をいただいたことにした。勿論、図工の時間
として実施した。指導に当たっては、2017年改訂の小
学校学習指導要領解説図面工作編第5学年及び第6
学年における「思考力・判断力・表現力等」に関する
「A表現」(17)イ「絵や立体、工作に表す活動を通し
て、感じたことを、想像したこと」を踏まえ、図工で育
成する資質・能力について指導をいただくよう打
合せを行った。

このようなプロセスを辿りながら、図5に示す教科
等横断的なカリキュラムが完成した。尚、このカリキ
ュラムを進めていく上で必要となる校内外の専門家と
して、芸工大の先生方等の活用を図った。また、第5学年での実践の課題から、「学びに向かう力」を育成するには郷土に対する興味・関心や愛情を育むため、山形大学の先生や村山民宿学会の先生のところを通じて、主中に郷土の歴史や産業の様子等について学んだ。さらに、山形郷物の発展に寄与した長谷川雅也氏の子孫である長谷川雅也氏から、山形郷物の発展に寄与した雅也氏の努力・工夫の話を聞くことも設定した。

「カリキュラム・マネジメント表」の下段は評価を記載することにした。「カリキュラムの側面」の「評価と改善の充実」について、特に総合的な学習の時間において、日々の学習における子ども個々の評価を適切に実施していくことが重要であると考えている。

② 考察

学びに向かう力を高めることを重点課題にして取り組んだ『地域のよさをＰＲしよう！』の実践を、学校活動での子どもの姿、地域への興味・関心や肯定感に関する調査結果、振り返りから見えるC児の変容から考察し、「カリキュラムの側面」を踏まえたカリキュラム・マネジメント表に基づく実践の成果と課題を整理していく。

学習活動での子どもの姿であるが、学習の導入で山形大学の先生から「地域のよさ」についての話を聞いていたり、村山民宿学会の先生に「宮町七不思議」の説明を聞くしたりしながら、子どもも実際に調査活動を繰り返した。子どもたちは、自分なりの「地域のよさ」を見つけることができた。そして、国語の学習を通じて地域のよさをＰＲするパンフレット作成を行った。子どもたちはパンフレット作成に興味を持ち、山形県内のパンフレットを集めたが、パンフレットにはどのような特徴があるのかを分析した。さらに、昨年度に引き続き学外の専門家として芸工大の先生方から、主にパンフレットにおけるデザイン面について図画工作と関連を図りながら指導・助言をしてもらった。昨年度に作成したパンフレットをどのようにＰＲ活動に使っていくかについて話し合いを重ね、修学旅行で県外の人に手渡しをしたいという図画が生まれた。それには、手書きのパンフレットを増し刷りしなければならずカラーデザインでなくなくなるという問題が生じた。子どもたちの経験から町でチャレンジやパンフレットをもっとも興味がないと考えて作られても、受け取っても見られないことが多いという意見が出された。そこで、パンフレットに加え、ＰＲグッズとして本に挟む「袋」に、ＰＲする内容を絵で盛り込み手渡しすることになった。「袋」の作成の際も、芸工大の先生方から指導・助言を受けてもらった。修学旅行の半日を活用して、作製したＰＲグッズ（「袋」）を県外の人に手渡しすることになった。その後、「袋」をもらった方から御礼のメールをもらうことができ、ＰＲ活動の効果を実感することができた。子どもたちは、ＰＲ活動第二弾を行うことになり、前回のパンフレット作成の反省を基に、県内の人たちへのＰＲ活動が行われた。

次に、第5学年の実践を踏まえた第6学年の実践課題「地域への興味・関心や肯定感を高める」ことに対する調査結果であるが、前述した表4のアンケート同様に再度実施した。結果は表5のとおりである。

表5 アンケート結果②（2018年1月実施）

<table>
<thead>
<tr>
<th>喜び</th>
<th>どちらかと いう好き</th>
<th>どちらかと いう嫌い</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>男子</td>
<td>21%</td>
<td>65%</td>
</tr>
<tr>
<td>女子</td>
<td>6%</td>
<td>82%</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>13%</td>
<td>74%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※（ ）内は第5学年時の2017年3月調査結果
※男子14名 女子5名 計31名 高野学級で実施

昨年度末に比べると地域のよさに気付きた地域のこと好きという子どもの割合が大幅に伸び、学区全体でおおよそ2割増加である。これは大きな変容である。

最後は、地域への興味・関心、学びに向かう力が高まったC児の変容を、授業で使用する「振り返りシート」の記載事項を基に述べる。（※教員校本もあるが、C児の表現をそのまま記載）

C児は、振り返りもほとんど書きがない子どもであったが、第5学年での「振り返りシート」の主なものを受けと表6のような一言の振り返りである。

表6 C児の「振り返りシート」（第5学年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>月日</th>
<th>C児が書いた振り返り（原文）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>9月29日</td>
<td>ノートをかいてきた（しかるべき）</td>
</tr>
<tr>
<td>9月30日</td>
<td>やることをかんがえた</td>
</tr>
<tr>
<td>10月13日</td>
<td>さかなやすさんにむかしのことをきけました。</td>
</tr>
<tr>
<td>11月4日</td>
<td>きょうおやさんをききました</td>
</tr>
<tr>
<td>11月8日</td>
<td>きょうは、はじめてしごとをした</td>
</tr>
</tbody>
</table>
C児とは個別に対話し、C児の活動の支援等の重要性、C児の「振り返りシート」における学びの事例を見ることで、学びの内容を理解することができた。

表7  C児の「振り返りシート」(第6学年)

<table>
<thead>
<tr>
<th>日付</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
</table>
| 11月1日 | 今日は、パンフレット作りへ計画をたててからパソコン

パンフレットを作成するための計画を立て、パソコンで作るという一連の学習過程が意識されている。また、班長と分担して活動している様子も見られる。さらに、次に時間の見通しの振り返りを行う。

C児は、5年生で次の学習活動における実行委員に立候補し、話し合いの黒板書をなっている。また、C児の表5のアンケート結果は、「好き」を選択しており、5年生のときの「どちらかというと嫌い」から、地域に対する肯定的な意見ができるようになってきている。

地域のよさをPRしよう！というテーマでの第6学年の実践を、学習活動での子どもの姿、地域への興味・関心や肯定感に関する調査結果を、振り返りから見られるC児の変容から見えてきた。

その要因について「カリマネ三つの側面」から考察していくこととする。

教科横断的な視点でのカリキュラムの作成は、教科横断的なカリキュラムを作成するために、『カリキュラム・マネジメント表』を作成し、国語や国語工学等の関連を図ったり、内外リソースとして苦工の先生方、山形大学や村山民俗学会の先生方に関わってもらった。

その中で、パンフレットやPRグッズ作成に関する名古屋子どもが身に付けている知識や技能が引き出され、新たな知識が得られており、作成物の質も高まり子どもにとって納得のいくものとなった。

結果、自信をもって、修学旅行先や県外の人に手渡しすることができた。さらに、外部の先生方から地域についての情報を聞くことで地域に関する知識が増えた。そのことを実際に確かめることができ、調査活動の意欲が高まっていた。さらに、聞き情報と実際に調査した事例が関連付けられ、聞き情報がいかなる知識へと変容し、これまで疑問だった自分なりの「地域のよさ」を見つけるようになった。

このように、カリキュラム・マネジメント表を基に、教科横断的なカリキュラムを作成し、それに基づいて教育活動を展開するにあたり、積極的に校内外の人材又は物の資源を活用することで子ども一人一人の学習の質が高まり、子どもの地域に対する見方に変容が見られた。「教科横断的なカリキュラムの作成」と「人材又は物的体制の確保」を関連付けて教育課程を編成していく進め方は、教育活動の質の向上につながる。

「評価と改善の実行」の側面からは、育成すべき姿・能力の共有を合わせて、その姿勢・能力が子ども一人一人に確実に育成されたのか否かを適切かつ合理的に評価する方法を明らかにしていくことが必要である。そのためには、カリキュラム・マネジメント表を使えば、育成すべき姿・能力について重点を図っていくことが求められる。評価命題が多出来た場合、評価命題は複雑化することもあり、評価命題自体を評価しないという状態に陥る。また、子ども一人一人が、確実に育成すべき姿・能力を身に付けられるよう、本実践のように横断的な学習の時間を中核に教科横断的な視点から教育課程を編成することは有効であったと言える。

「人的又は物的な体制の確保」の側面からは、第5学年での実践及び上記で述べたように、本物・本質に触れたことによる知識・技能の習得、学びに向かう力の高まりへの努力は大きかった。

このことから、教科横断的な視点でのカリキュラムの作成「評価と改善の実行」「人的又は物的な体制の確保」は相互に関わりながら効果を示すことがわかった。その意味でも「カリマネ三つの側面」を踏まえたカリキュラム・マネジメント表の作成による実践は、これからのカリキュラム・マネジメントの進め方の一つとして提案できる方策であるという結論に至った。

(4) 2年間の実践に基づく「山三小横断的な学習の時間の全体計画」の改善

学校における総合的な学習の時間の全体計画については、実践の成果をより子どもたちの実態に即したものに改善していくことが望ましい。学級担任としての2年間の実践から、下記により総合的な学習の時間の全体計画を改善していくこととした。

一点目は、探究課題の追加である。図2のとおり、
地城や学校の特色に応じた課題として現在は4つの探究課題が設定されている。2年間の実践を通して新たな「地域の魅力」（地域のよさや課題を対象に探究する）を加えたい。

二点目は、追加した上記の探究課題の解決を通して育成される「知識・技能」の追加である。次年度の総合的な学習の時間の全体計画に追加したい「知識・技能」は次のとおりである。

ア 地域の名所や跡地、商店街、地域で生産・販売されている特産物等、町の魅力に気づく。
イ 町の魅力を守り続ける取組に力を注ぐ地域の人々の思いを認識する。
ウ 自分たちも町の魅力を継承していく活動ができないことを認識する。

三点目は「カリマネス三つ側面」から成果として明らかになったことを加えるのである。「教育学等横断的な視点でのカリキュラムの作り」については、新たな項目を起こし、内容及び質素・能力の両面から関連する教科の単元・題材名を記述している。つまり、「目的又は物的な体制の確保」の項目も起こし、活用した人材について考察として記述していく。

これらは、いずれも学級担任が2年間の実践を通して明らかになった総合的な学習の時間の全体計画の改善点である。学級担任のより客観的な学校経営への参画という視点からの成果は、全体計画に沿って実践を試みるだけでなく、子どもと教師の思いや願いが融合した実践を通して得られた成果を積極的に全体計画に取り入れていく取組が求められる。そのことにより、全体計画が形骸化せず、常に実践を通して計画が更新されていく実効性の高いものとなる。（高野 浩男）

4 おわりに

本論題「学級担任によるカリキュラム・マネジメントの進め方」として明らかになったことの一つ目は、「カリマネス三つの側面」を踏まえた「カリキュラム・マネジメント表」を作成しての実践は、教育活動の質の向上を図ることができたということである。

1年度、第5学年度の「地域の方々が元気になる活動をしよう！」の実践の結果を「カリマネス三つの側面」から分析してみると、3つの側面の「他者の又は他物的体制の確保」については、有識者や地域住民等カリュマに位置付け活用されれば、その効果があることとは子どもが振り返り判断しうるからである。「他者の又は他物的体制の確保」は、計画段階で活用の目的に即して適正な位置付けができるかどうかがポイントとなる。

その意味では、第5学年の実践で活用され7人の人材は適切にカリキュラムに位置付けられたと言える。

「教科等横断的な視点でのカリキュラム作成」について、教科等の単元・題材の内容を加え、どのように関連させるかという「内容」に着目するだけではなく、目指す質素・能力の育成のためどのように関連させるか、または合科にするかなど、指導者の目的に応じてカリキュラムを作成していくことが大切である。さらに、総合的な学習の時間等においては、個人やグループごとに課題が依存されることを多く、学級全体の学習として他教科等との関連等を考えることから困難な場合もある。さらには、目指す質素・能力を育成するため適切な教科等横断的なカリキュラムを作成し、実践されなければ、もう一つの側面「評価と改善の充実」には機能しないということは自明のことである。高野が、第5学年度の実践でこれらの問題に直面したことは、考察の中で述べているとおりである。

高野は第5学年度の実践の考察を踏まえ、第6学年度では「カリキュラム・マネジメント表」の作成に課題解決の糸口を見いだした。そのよさは高野が分析・考察したとおりである。「学校教育目標を教員一人一人が具現化する」という視点でみると、次に学校教育目標と子どもの活動と成長をつなぐ具体的なプランと言え。ただ学校教育目標すべてを具現化する構想を考えることは理想であるが、まずは、重点目標一つずつ経り、丁寧な評価と改善を繰り返しながら実践していくことが大切であると考える。藤倉（2017）は、「今回の改訂で、カリキュラム・マネジメントや授業研究について言及しているのは、修業期間に頑張って100点満点のカリキュラムをつくり、それを1年間用意して実践すればよいというわけではないからです。少なくてもよいので、子どもの実態に即して改善を図り、その結果の子どもたちの変容を見取りながら、さらに改善を図るという取り組みを、続けていきましょうというメッセージなのです。」と、無理なく継続的に実践していくことが重要性を述べている。強く共感できるし、前述した山形県小学校における「学校教育目標の具現化」及び「カリキュラム・マネジメントの認識と取組み」の調査結果も見ても、必然のことであると考える。

いずれにしても、高野が作成した「総合的な学習の時間『地域のよさをPRしよう！』を中心にしたカリキュラム・マネジメント表」は、学級担任の視点からの、しかも、総合的な学習の時間を中心したい一つの単元の小さな実践である。このような小さな実践を
積み重ねながら、「カリキュラムの側面」に留意したカリキュラムを作成し、評価と改善を繰り返しながら、目標を達成していくことのできる力を一人一人の教員が高めていくことが大切である。

本論題に対して明らかになったことの二つ目は、学級担任の実装の履歴が学校全体の計画を更新したということである。

高野は、統合的な学習の時間における『地域や学校の特性に応じた課題』に関する学習を第5、6学年2年間でわたって実施し、その実施の履歴をもとに「山三小統合的な学習の時間の全体計画」を改善していることは注目すべきであること。各学校の教育課程は学校や地域の実態を踏まえることも頑著であるが、特に子どもの実態を適切に把握して編成されることが望ましいと言える。学級担任の実装を基にした成果と課題から、進められたカリキュラムを見直し、その改善案を考え、学校全体の計画を更新していくという進め方は、教職員全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの一つの好事例と言える。

（中井 義時）

注
1) カリキュラム・マネジメント」の表記については、文部科学省の文章等で登場する以前から、カリキュラムとマネジメントを「つなぐ」ことを重視した。中留、田村知子により「カリキュラム・マネジメント」と表記されてきたが、本稿では、文部科学省が統一して使用してきた、カリキュラムとマネジメントを分け、引用文以外は中黒で「つなぐ」という「カリキュラム・マネジメント」と表記する。

2) 中井が、地域内で中堅教員等として活動している118名（小学校10年生教員39名、小学校教務主任53名、指導主事26名）を対象と、「①学校教育目標の具体化等に関する調査」、「②カリキュラム・マネジメントの認識と取組等に関する調査」を実施したものである。（2017.4.19～2017.9.12）

引用・参考文献
中央教育審議会 2008、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo01/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/05/12/1216828_1.pdf（最終閲覧日2017年11月1日）。
中央教育審議会 2016、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo01/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日2017年11月1日）。
中央教育審議会 2003、「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）」、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo01/toushin/03100701.htm（最終閲覧日2017年11月1日）。
文部科学省 2017、「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」。
文部科学省 2017、「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」。
文部科学省 2017、「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」。
田村知子 2017a「カリキュラム・マネジメント入門」東洋館出版社 p30。
合田哲雄 2015、「これからの学校管理に求められるカリキュラム・マネジメント」、「教育研究」2015年6月号、教育開発研究所18-21。
文部科学省 2017、「小学校学習指導要領解説国語編」。
無藤隆 2017、「考えるための道具を子どもに渡し、自立して学ぶ人を育てる教育改革を目指す」、「総合教育技術」2017年10月号、小学校、42-44。
文部科学省 2008、「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」東洋館出版社。
田村知子 2014「カリキュラム・マネジメント一学力向上へのアクションプラン」、「日本標準ブックレット」
田村知子 2011「実践・カリキュラム・マネジメント」、ぎょうせい
中田統治 2005、「確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント」、「教育開発研究所」。
田村知子、村川雅弘、吉富正、西岡加奈恵 2016、「カリキュラム・マネジメント・ハンドブック」、ぎょうせい。
中留武昭、村田知子 2004、「カリキュラム・マネジメントが学校を変える」、「学事出版」。
中留武昭、曾我悦子 2015、「カリキュラム・マネジメントの新たな挑戦」、「教育開発研究所」。